

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390100297		
法人名	株式会社ヴィーヴル		
事業所名	グループハウスあい		
所在地	熊本市南区田迎1-7-20		
自己評価作成日	2023/2/15	評価結果市町村受理日	令和5年4月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和5年3月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念であるお客様一人一人の「らしさ」を大切にしている。行動を制限することなく、したい事・できる事を支援し、毎日を楽しみ過ごしていただけるよう心掛けている。PTSDに対しても原因を分析し、色々ケアの方法や声掛けを検討しながら、安心して穏やかに過ごしていただけるように支援している。面会や外出等も制限せず、感染対策を行いながら実施している。
スタッフに対しても働きやすい環境を整備することで、楽しく仕事ができ、それが日頃のケアへ生かされていると思われる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

桜並木や整備された公園、ショッピングセンター等の商業施設や医療機関、飲食店などが点在する南区を代表する利便性の良い立地にあるが、花き栽培が盛んである環境はビニールハウス等懐かしさを感じさせてくれる。入居者一人ひとりを尊重し、特技や趣味の継続の他、その方らしい時間を過ごせるよう取り組んでいる。訪問当日も笑い声の中、散歩中に摘んだ草花を飾られる方、100歳を過ぎ他入居者も食の進まない入居者に気を配ったり、計算ドリルへの取り組み等に穏やかでメリハリのある日常を垣間見る事が出来た。また、毎年梅やラッキョウ漬け、干し柿づくり等出来得る限りの出番が用意されている。家族はホームでの最終を望まれている方が殆どであり、職員もまたその思いに応え「最期まで支援させていただきたい」と、主治医や訪問看護と連携を図りながら入居者の日々を支えている。コロナ禍で地域や家族との交流も難しかった中で、状況を見ながら以前のような取組を再開し、「そのらしさ」で喜びと安心のある毎日を支援していきたいと意欲的なホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に掲げており、出勤時に黙読するようにしている。また、新年度の事業所全体の会議で代表より理念についての説明がある。ミーティング時にも理念を心掛けているか尋ねるようにしている。	新年度毎に代表より理念について説明が行われるとともにスタッフミーティング時に理念を想起させた話し合いを行っている。“個々の望み・思いを知り、寄り添い、安心して過ごせる空間作りを目指すこと”を目標として具現化して示し、特に、コロナ禍のなかでホーム内で退屈にならないようにと、入居者の“らしさ”に注視してケアを支援している。職員の認知症があっても“楽しかった”という気持ちがあるとして、日々を大切に過ごされることをモットーとしてケアに当たっているという心強い言葉に理念が息づいているとホームであると確認された。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域清掃には積極的に参加している。また、ご近所の方への挨拶や通学の子供たちへの声掛けも積極的に行うようにしている。	散歩中には近隣住民からの声掛けや登下校中の子どもたちとの触れあいもあり、小学校での認知症講座及び車椅子体験学習等講義に出かけている。コロナ感染症の状況を見ながらオレンジカフェの開催や地域サロンに参加している。自治会に加入し、回覧板を通じて地域の情報をリサーチし、清掃活動への参加等出来ることを見出しながら地域の一員として活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍のため開催は少なかったが、オレンジカフェ1回、地域サロンへの参加1回、小学校での講習2回参加させていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	4・6・10月開催 8・12月は書類配布1回だけだが、ご家族の参加もあった。ご家族へは議事録を配布している。	コロナ感染症の状況により書面審議時には議事録を手渡し、対面開催時には入居者の様子や研修、委員会報告、事故報告等とともに参加者からの情報提供の場として運営推進会議が生かされている。自治会の行事や研修案内が区の「人生会議」に参加出来た事等、この会議の開催の意義を見出している。家族には議事録の送付により情報を発信している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営上の質問は質問票にて行っている。包括担当者とはホームの空き状況や地域の情報等の連絡を取り合っている。	行政担当者とは対面する機会はないが、必要な書類や疑問等には質問票にて連絡を行っている。地域包括支援センターとは運営推進会議を通じて長い関わりがあり、空き状況を確認や多様な情報が得られる等協力関係が出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年2回以上の身体拘束廃止に関する勉強会を開催している。また、ケアカンファレンスやミーティング時に不適切なケアが行われていないか話し合うようにしている。	全体会議や毎月のケアカンファレンス時に身体拘束についての検討や権利擁護委員会の中で話し合い、意識を強化させている。転倒の危険がある入居者に足元センサーを利用してはいるが、家族への説明とプランに組み入れ、必要がない場合には取り外している。職員は、“顔の正面から 笑顔で声かけ”を日々の目標として、入居者に寄り添いながら声を掛け、スピーチロックの無いよう注意喚起している。入居者の外出傾向等を把握し、歩かれる入居者に職員と一緒に付き添う等自由な環境である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会の他に、ニュースになった事例等についても話し合い、自分たちのケアを見直している。また、他の部署の職員からの意見等も話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者主体による権利擁護委員会を毎月開催し、コロナ渦の中お客様の権利が守られているか話し合っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時や報酬改定時には書面とともに各ご家族へ個別に説明し同意を得るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会を遠慮されているご家族も多いため、電話にて近況報告をし、面会へのお誘いや意見等もお聞きしている。	コロナ禍の中で、面会の遠く家族もおられるが、介護計画書更新(3ヶ月毎)時の訪問時に意見や意向を聞き取りしており、外出への希望や、遠方からの帰省に合わせ等家族から出されている。面会は距離を保ち、マスク使用や玄関先等感染対策を取りながら対面出の面会を支援している。家族会とのはいかないものの、家族との交流として银杏見学が活かされている。	コロナ感染症の状況次第では、家族会の開催に向け検討される事を期待したい。今後も、家族の忌憚の無い意見等を、ホーム運営に反映いただきたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティング時会社の運営に関する報告を行っている。日頃より意見を言いやすい雰囲気作りを心掛け、スタッフが意見を言いやすいようにしている。	管理者として日々のケア(ケア上の問題や職員のアイデア等)について、ケアマネジャー・担当者との話し合いや、申し送りを徹底している。また、ラインを通して情報を共有化し、管理者から職員の意見は代表へ上申する体制としている。また、希望休や家庭的な都合等柔軟に対応し、年2回の面接による把握した事案は代表及び管理者で話し合等職員が意見等を出す機会を作り、働きやすい環境を整備している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回人事考課表を用いて評価を行っている。また面接も2回以上行い思いや不満等聞いている。その後代表や経営会議で話し合うようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	力量表をもちいて自己評価・他己評価を行い、その格差を埋めれるよう話し合っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型連絡協議会に入会し、様々な情報や他施設との交流を持つようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問と他関係事業所への聞き取りを行い、基本情報を確認し、スタッフ全員が状況を把握するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み前に必ず見学していただくようにしている。どのようなケアを行っているか知っていただき、ご家族が不安に思っていることなどじっくりお聞きするようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学時お話を伺い、他のサービスの紹介も行い検討していただくようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援を念頭に置き、できないことへの支援を心掛けている。一緒に色々やってみようことにより本人の意欲を高められるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会を遠慮されているご家族が多いので、面会へお誘いしている。感染対策をしながら少しでも多くのふれあいを持てるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	電話や手紙などできる限り継続してもらえるよう支援している。	初詣や散歩がてらに買物に出かける等社会資源を生かしながら支援している。デイサービスでの催しに参加したり、家族の希望により自宅で正月を過ごされる等家族の協力も得ている。入居者同士の日常に馴染みの関係にある事が表われている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の生活や状況に応じて席を考え、利用者同士で会話ができるようスタッフも間にはいるなどして支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの終了したご家族に対しても会社の行事への招待状やお便りを出すようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話やケアの中から本人の希望や思いを察知し、共有するようにしている。	入居者への日々の関わりや寄り添いに努め、したい事の申し出や、自分だけのんびりしては申し訳ないとして“仕事をしたい”との申し出もある。入居者の中には発語困難や意思を表示されることが難しく、不安そうな顔色を見ては声を掛け、表情やしぐさ等により推察しケアに直結させている。また、笑顔もバロメーターとして捉えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族や本人のお話しなどから今までの生活歴をお聞きし、施設でも同じように生活できるよう必要な物やケアを考えている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の個人記録に心身の状況やその時の表情や言動を記録し、必要としているケアを話し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンス時には担当者を中心にそれぞれの意見を積極的に出し合うようにしている。ご家族へは事前に状況を報告し要望をお聞きするようにしている。	カードックスにプランとカンファレンス記録を綴じ込み、情報の共有化及び日々のケアに反映させている。3ヶ月毎にケアカンファレンスを開催し、心身の状態変化を見ながら、継続の可否を見極め、変化があれば新たに作成している。家族の思いである“このまま出来る限り穏やかに過ぎて欲しい”とする思いに応え、主治医や薬局等と連携した体調管理や援助方針を明確にする等具体的且つ詳細な個別的なプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	総合記録と個人記録はすぐに記入し、また見れるようにしている。行ったケアで上手くできたことなどを活かし、計画を見直している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人内のデイへ遊びに行ったり、委員会をあいだで開き他部署のスタッフとの交流を持つようになっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のため行えていないが、地域で開催される催しには今後も参加していきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今までのかかりつけ医への受診を推奨している。ご家族・本人の希望を優先している。緊急時等受診の付き添いも行っている。外部の医療機関とも連絡を情報を共有し、適切な医療が受けられるようにしている。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、現在ももとの医療機関へ家族による受診や、協力医療機関による2週間に1回の訪問診療と2階有料施設への医師訪問時は相談を行うことが出来ている。専門医については家族による受診や、状況に応じて職員も同行している。歯科については必要な方のみ、訪問による診療や口腔ケアが行われている。歯科衛生士による口腔ケアはゆっくり、その方のペースで進められており、入居者もスムーズに受けておられる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	管理者が看護師のため日々の報告はまめに行えている。不在時でも連絡がとれる体制はとっている。また、法人内の訪問看護師による協力体制も整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が必要なときは、3ヶ月は部屋を確保し退院に備えておくことを伝え安心していただいている。定期的にご家族や病院と連絡を取り、早期退院に向け支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に必ず緊急時や重度化した場合の対応について確認している。また看取りについての説明も行い同意を得ている。その後も状態変化時には必ずご家族に再確認するようにしている。	入居時に緊急時や重度化した場合の対応について同意書を交わし、変更があればその都度記入を受けている。ホームでの最終を望まれる方が殆どであり、また、ホームも最期まで支えていきたいという思いから家族が安心されるよう、入院が必要な場合は3か月部屋を確保し退院に備えておくことを伝えている。終末期支援については、ホーム内や外部研修をはじめ、法人の訪問看護師によるアドバイスを研修として学び共有が図られている。	本人・家族の思いに寄り添いながら、職員も最期までホームで支えたいという思いで日々の支援が行われている。今後もホームに出来得る最良の支援を継続されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	日頃のケアの中で看護師が緊急時や事故時の対応については指導を行っている。本年度は緊急蘇生法の訓練も消防署の指導のもと行えた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルは委員会を中心に見直しを都度行っている。火災訓練・水害訓練も実施できている。地域の方への協力体制が課題であると会社で検討している。	今年度火災訓練はコロナ禍などもあり12月が2月に延期され、今月2回目が予定されている。また、水害については夏場実施されている。ホーム内の安全チェックは、防災委員を中心に行われ、職員も意識を持って居室内を掃除をする時はコンセントなども確認している。備蓄についてはホーム分はリストに沿って備えられ、会社全体で職員の分も確保されている。	地域との協力体制を課題としており、運営会議を活用しながら進められることも良いと思われる。今後の取組が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	否定的な言葉は使わず、本人を尊重した丁寧な声掛けを心掛けている。行動も制限しないよう静かに見守ることも心掛けている。本人不在の居室へもノックや声掛けをするようにしている。	入居者への尊重と丁寧な対応に努めることを職員間で共有している。その人らしい暮らしができるよう、職員側が一方的に決定するのではなく、一人ひとりの行きたい所、やりたいことなど本人の意思を大切にしている。身だしなみやおしゃれにも配慮し、好みの衣類を一緒に選択したり、髪のカットは訪問理美容支援や家族と外出して髪を切られる方もおられる。居室へ入る際は在室の有無に関わらず、ノックや了承を得て行なわれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事の内容やレクリエーション等いつもではないが、スタッフが一方的に決めるのではなく、利用者に希望を聞くようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度の時間は決めているが、本人の意思と体調を優先している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から好まれていた格好(洋服や髪形など)とできる限り同じようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	季節や行事に合ったお食事や、和食から洋食までその日の担当スタッフが考え作っている。できる方には準備や片付けも手伝ってもらっている。職員による検食も実施し、味や硬さなどの確認も行っている。	昼食はご飯と汁物をホームで作り、主菜・副菜は配食サービスを活用し、朝・夕食は食材配達を活用しながら職員が調理している。献立は季節感を取り入れ、1日は赤飯を提供し、おせちやひな祭り食などの行事食や手作りおやつ(スポンジケーキ・ゼリーなど)も好評である。飲み物は個々の好みを聞きながら、日本茶・珈琲、紅茶・ジュース・豆乳を準備する他、家族も好物(甘酒)を持参されている。入居者の食への関わりとして片付けなど出来る事や、保存食(らきょうや梅づけ・干し柿)作りなど出番が用意されている。ホームは今後、献立表のわかりやすい表記について検討中である。	朝・夕食は鮮魚専門店の利用など拘った食材で作っており、このことも家族へ伝える事で安心につながると思われる。検食者を設けており、今後は味や量、入居者の発せられた一言など、今後活かせる記録簿の記入が期待される。また、食事支援の際は、職員も着席して行うことで、本人や周囲もゆっくりとした雰囲気保たれると思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日の食事量や水分量は必ずチェックし、すぐ分かるようにしている。高カロリーの補助食品や色々な飲み物等も準備しており、すぐに補えるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は口腔内に食残がないようがいをしている。夕食後の口腔ケアは時間をかけるようにしている。訪問歯科1~2回/月 衛生士による口腔ケア1回/週 その中でケアの方法などの指導ももらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者個々の排尿パターンにより時間や行動の様子でトイレへ誘導している。日勤帯の布パンツ使用も増えている。	個々の排泄パターンを共有し、日中はトイレでの排泄を基本とし、自立の方の継続や声掛け、誘導の必要な方にはプライバシーに配慮しながら支援している。昼間は布パンツで過ごし夜間リハビリパンツに替える方、夜間のみ念のためポータブルトイレを設置しておく方など個別支援の充実が図られている。トイレは4か所設けられており、着席場所や居室の近く、使い慣れた場所を使用されている。排泄用品はホームで準備しているが、家族が購入し持参されることもあり、その方の現状や適切な品について伝えている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ビフィズス菌入りの発酵乳を毎朝飲んでいたり、便秘解消に良いとされている食品も取り入れるようにしている。適度な運動やマッサージなど行うようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	2日置きの入浴を基本とし、利用者の希望や体調を観察しながら調整している。無理強いはせず、本人の意思を尊重している。リフトもあり全員が湯船につかることができる。	週2～3回、好みの湯温を本人・家族に聞きながら午前中を中心に入浴支援を行っている。浴室は清潔を心掛け、個浴やリフト浴を使用し、湯舟に浸かってもらうことでゆっくりとした時間を味わってもらっている。浴室までの行き帰り、職員の「1、2、3、4」の掛け声に「5、、6、7、8」と、返答しながら歩く入居者の姿にほのぼのとした日常を見る事が出来た。シャンプー類は好みや使い慣れた物を使用されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は決めておらずその日の利用者の状況で判断、誘導している。夜ゆっくり休むことができるよう、昼間の休息や過ごし方を工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理は看護師と在宅薬剤師で行っている。薬の説明書もすぐ見れるようにし全スタッフが何の薬を飲まれているか把握するようにしている。誤薬が内容服用時にはダブルチェックするようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者個々にできる事やしたい事が提供できるよう、パズルや塗り絵など色々準備している。また、ノンアルコールビールや甘酒など好んで飲まれていたものなども準備している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候の良いときは近隣の公園など散歩に出掛けている。今年はイチョウ見学や初詣にも車で出掛けることができた。イチョウ見学はご家族も一緒に行くことができた。ご家族との外出や外食等も感染対策に注意してもらいながら実施している。	社会資源も多く出かけやすい地域であり、公園への散歩や神社への初詣に出かけている。回覧板で地域の祭りなどの情報を得る事が出来るため、現在参加は出来なくても掲示コーナーで紹介している。家族の協力による外出としては、感染症対策を施し、外食を楽しまれたり、イチョウ見学には数班に分けて家族も一緒に参加されており、入居者も大変喜ばれたようである。	桜並木や近隣宅の見事な菖蒲畑を間近に見る事が出来る環境にあるホームは、コロナ禍にあっても可能な限り散歩の機会を支援している。感染症の終息を見据え家族の外出への意向を聞きながら実現に至る事を期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	普段金銭は職員が管理している。買い物や外出希望時にはご家族が職員が同伴している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	詰所の電話やスマートフォンを使用し電話出来るようにしている。タブレットを使用したTV電話も行っているが、上手く活用できていない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	月ごとに壁飾りを変えたり、会社で植えている花や職員の家の花など飾り、季節を感じられるようにしている。インスタグラムにもアップし、利用者の様子等も発信している。	リビングには入居者も一緒に作成した月ごとの壁面が掲示されている。また、散歩中に摘んだ草花や職員が持ち寄った花が飾られ季節を感じる事が出来る。席の配置は身体状況や相性なども考慮して決定しており、テレビを見たり入居者同士や入居者と職員が楽しく談笑する光景が見られた。中には午後から大好きなテレビ番組(時代劇)を楽しみにされている方もおられるようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	TV前にソファを置いてあり、ゆっくりTVを観たり気の合う方同士でおしゃべりできるようにしている。一人でゆっくり外を眺めたりできるようなソファも準備している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には可能な限りそれまで使われていた物を持ってきていただくようにしている。安全で居心地の良い居室になるよう心掛けている。	掃き出し窓の開放感のある居室は十分な広さがあり、コロナ禍の現在、衣替えや寝具の調整は職員が中心に行っている。入居時に本人にとって馴染みの品の持ち込みを依頼しており、家具や小物の他、写真が多く持ち込まれ、職員による誕生祝いカードも掲示されている。中にはラジオを持ち込まれているが、現在は自室で聞かれる機会はないようである。就寝時のみ居室に帰る方や食事以外は自室で過ごされる方など、個々に応じて安心して過ごすことが出来るよう、見守りや寝具の整頓、換気などに努めている。	天候の良い日は布団の日光干しにより気持ちの良い安眠を支援している。このような取組も家族へ伝える事で安心につながると思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	部屋やトイレなどの表示はわかりやすいように大きくしている。行動の妨げにならないよう、一人一人の動線を考え動きやすいようにしている。		